

いのちの葉

諸行無常のまっただ中で

浅田恵真

目次

おまかせの生活……………	4
真摯に自己を凝視する……………	8
仏法に出あう難しさ……………	12
捨て置くことができない……………	16
人間に生まれた幸せ……………	20
時期相応の弥陀の教えを……………	24
悟りの目を否定する現代人……………	28
渾身の力で真実を綴る……………	32
諸行無常のまっただ中で……………	36
仏教を人生の鏡に……………	40
お釈迦さまが私に向けて……………	44
どんなに気が合わない人でも……………	48

おまかせの生活

道は人によって弘まり、

人は道によって弘まる。

道心の中に衣食あり、

衣食の中に道心なし。

最澄師遺訓（光定『伝述一心戒文』より）

真宗に通じる言葉

浄土真宗内部には味わい深い用語はたくさんありますが、宗外の祖師方のお

言葉にも、真宗に通じる大切な言葉が多くあります。本書では、この宗外に目を向けて、その言葉を味わっていきたいと思います。

最初に取り上げたいのが、比叡山を開かれた伝教大師最澄（七六七〜八二二）師の遺訓です。若き親鸞聖人も比叡山でご勉強なされておりますので、最澄師の影響が多分に見られます。たとえば「愚禿」と名告られた出拠も、最澄師の『願文』に見出されます。次章で触れますが「愚が中の極愚、狂が中の極狂、塵禿の有情、底下の最澄」と語られます。

その最澄師のお言葉を、弟子の光定（七七九〜八五八）が記した『伝述一心戒文』三巻があります。弟子が記載したという点では、『歎異抄』と同じ性質の書です。ここに「先師云く」として、「道は人によって弘まり、人は道によって

弘まる。道心の中に衣食あり、衣食の中に道心なし」があります。「先師」とは最澄師のことです。

その師が「仏道は人間によって弘められます。しかし、人間は仏道によってこそ弘められるのです。だから、仏道を求める心の中にこそ生活があつて、生活を求める心からは求道心ぶどうしんは生まれてこないことに注意しなければなりません」という意味で、この言葉を語ってくださっています。

求道者の歩む道

これは仏道を歩む者にとって心しなければならぬ言葉だと思い、私の座右の銘にしています。仏道の中に自己を全て投げ入れた時、自然と求道者として

の道を歩むことができるのです。そのような生活をすれば「道は人によって弘まり、人は道によって弘まる」と語っておられるのです。

もし「衣・食」など生活全般を優先させたならば求道心は無くなります。しかし仏道を求める心を最優先に考えれば、自然と生活はその中に見出みいだされるに違いありません。

現実的には大変難しいことですが、真宗のご門徒の方々が「おまかせ」という言葉を口にされます。阿弥陀如来さまにすべておまかせするという、この「おまかせ」こそが、「道心の中に衣食あり、衣食の中に道心なし」という意味だと私は味わっています。そのような生活ができた時、自然とお念仏という「道」は「人」に弘まっていくでしょう。